新課程移行期の課題と実践

― 熊本県立第二高校の事例から ―

ほぼ10年に１度訪れる課程移行期には、
移行期ならではの共通の課題が存在するのではないか。
今号では移行期のポイントを整理すると共に、
現行課程にスムーズな移行を果たした熊本県立第二高校の実践を紹介する。

課程の移行期に学校の力を付けるポイント

『VIEW21』では、特集や当コーナーで新課程への移行期にかかわる記事を取り上げてきた。それらを整理すると左図のようになる。制度の変化を学校の指導改善の契機と捉えて、現在の取り組みを見直していきたい。

次ページからは、現行課程移行期に学校としての在り方を問い直し、実践に対する効果検証とそれを基にした取り組みの改善をして軌道に乗せることに成功した熊本県立第二高校の事例を紹介する。

課程移行期のポイント	熊本県立第二高校の実践
SIの見直し・再確認 ＊2011年2月号特集など	● 早朝学習の在り方の検討を通じて、自校のSIを再確認する
生徒の実態を精緻に把握 ● 中学校の指導状況を知る ● 高校入学時の生徒の状況把握を行う（高校入試分析など） ● 面談などをこまめに行い、短いスパンで生徒の変化を把握する ＊2011年6、9月号特集など	● 中学校訪問を行い、入学生の実態を把握して、導入期指導を改善する ● 担任と生徒との面談を充実させ、そこでの課題を学年団や進路で共有する
カリキュラム・指導計画の見直し ● 現行課程の総括 ● 柔軟性のあるカリキュラムを策定 ● 枠組み（カリキュラム）だけでなく、中身（授業）を充実させる方法を検討 ＊2010年2月号特集など	● SIから落とし込んだ３年間の進路指導ストーリーを策定する ● 月ごとの「目線合わせシート」を活用し、教師間で月ごとにすべきことを共有する ● 生徒把握と教師の情報共有を土台に柔軟に指導を改善する
授業・指導の見直し ● 「量から質」への転換 ● SIと生徒把握を基に授業をつくる ● 削られる内容、増える内容を意識して授業をつくる ＊2010年6月号特集など	● 早朝学習に応用的な問題も組み込む ● 「学校としての不得意科目」の基礎徹底のために、進度を調整

実践に対する評価（効果検証）

＊は関連する月号

学校事例

熊本県立第二高校

タイムリーな生徒把握と組織的な情報共有で生徒の変化に柔軟に対応

進学実績の低迷を機にSIの見直しを図る

熊本県立第二高校は、この10年で急速に進学実績を伸ばしてきた。現行課程が施行された2003年に205人だった国公立大合格者数は、09年には過去20年で最高の271人を記録した。この間、生徒数は2クラス分減っていることを考慮すると、同校の変革の成果がうかがえる。

同校が軌道に乗ったきっかけには、SIの見直しがある。クラス減に伴い04年から合格実績が右肩下がりとなり、05年の国公立大合格者数は160人まで落ち込んだ。特進クラスを設けてテコ入れを図ったが成果は上がらず、わずか2年で廃止という苦い経験もした。進路指導主事の石村秀一先生は、当時の学校の雰囲気を次のように振り返る。

「学校規模が大きいこともあり、大きな改革は難しい状況にありました。また、日常の業務も忙しく、どうしても学校全体が前年踏襲の意識から脱却できなかったのだと思います。指導の方向性も学校全体で共有していなかったため、教師によって指導のばらつきがあるという状態でした」

SIの確認は、早朝学習を見直す議論の中で自然と出てきた。早朝学習は、課外を行わずに自学自習の習慣を付け、基礎基本を定着させるために1988年から伝統的に行われていた取り組みだった。しかし、当時は学習量に重きが置かれ、生徒がこなせないほどの量を与えるなど、本来の趣旨とは異なる方向に進みつつあった。

このままの「量」を維持するのか、「質」への転換を図るのか、あるいは両方をバランスよく追うのか。議論を続ける中、話題はいつしか、今後、学校が進むべき方向はどこか、どのような生徒を育てたいのかということに深化していった。月1回の職員会議を重ね、時には生徒を交え、自校の在り方について話し合ったという。

そこで得た結論は、自ら課題を見つけて学べる生徒、自律的に学びに向かう生徒を育てることだった。早朝学習は、自律的な学習態度を育てるために必要という観点から、基礎基本の重視という原点に立ち返り、生徒が身に付けておくべき内容を時間内に終わる分量に精選した。「合格実績が下がっている中で学習量を減らすことは勇気が必要でした。SIを共有していたからこそ、生徒に何が必要なのかという軸はぶれずに指導改善が出来たと思います」と教務主任の前田誠吾先生は振り返る。

熊本県立第二高校
石村秀一
Ishimura Shuichi
教職歴20年。同校に赴任して17年目。進路指導主事。

熊本県立第二高校
前田誠吾
Maeda Seigo
教職歴23年。同校に赴任して14年目。教務主任。

熊本県立第二高校
◎2011年度で創立50年目を迎えた。理数科と、県下唯一の美術科を擁する。2003年からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を継続して受けている。
◎全日制／普通科、理数科、美術科／共学／1学年約400人
◎2011年度の合格実績（現浪計）◎国公立大は、東北大、東京大、九州大などに280人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ406人が合格。

生徒把握に努め導入期指導を改善

教育課程の移行という変化の激

しい時期を乗り切るためには、生徒の実態把握にしっかり努めることが重要だ。

同校は、出来るだけ早く生徒の変化に応じられるよう、入学前から生徒把握に努めている。その一つは中学校訪問だ。同校に入学してくる県内約２００校の一部に教師が手分けをして訪問し、生徒の学力や気質、通学方法などの情報を得ている。また、地域で塾講師をしている卒業生に中学生の実態を語ってもらうこともある。これらの情報を基に、導入期指導に必要な要素は何かを検討し、内容を少しずつ変えている。

「入学直後は緊張感もあり、生徒に指導がよく浸透しますが、逆に導入期指導が緩いと後から厳しい方向への軌道修正を図ることは難しくなります。生徒の変化に応じて、中学生を本校の生徒にする指導が大切です」（前田先生）

中学校時代までに学習習慣が身に付いていない生徒が多いため、入学直後に行う宿泊研修では、ここ数年、学習の仕方やノートの取り方などの指導に力を入れてきた。近年は、友達づくりに不安を感じる生徒の気質を踏まえて、人間関係を育むためのコミュニケーションの時間を多く設けている。

新課程では二極化への対応が鍵になると予測している。学習習慣が身に付いていない生徒には、学習への姿勢を徹底的に指導する、生活習慣が乱れている生徒が多いようなら、入学当初から登校指導や服装指導を強化するというように、想定される変化に応じて指導内容も複数準備しているという。

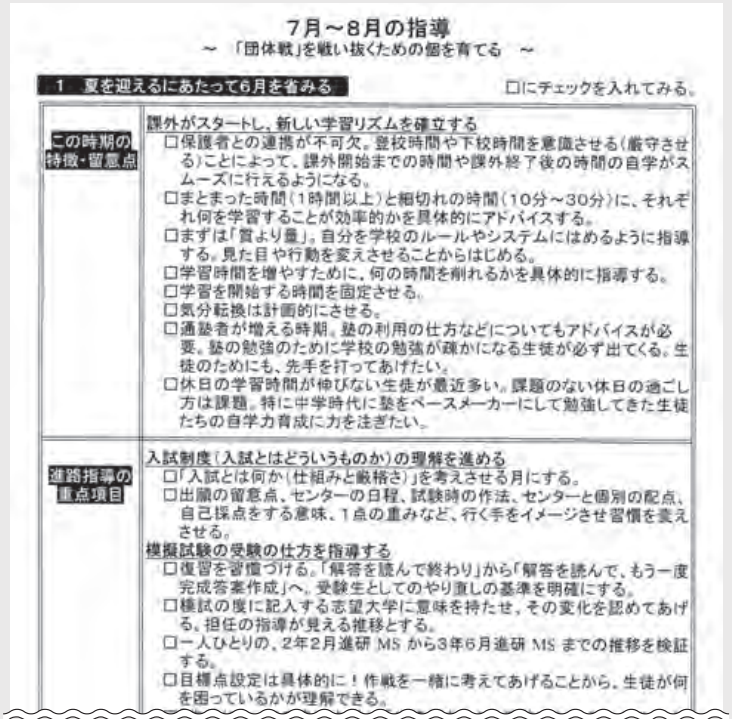
月刊の「目線合わせシート」で教師間の意思統一を図る

生徒把握と共に重視するのは、教師の目線合わせだ。まず、ＳＩに基づいて学校全体を貫く3年間の進路指導ストーリーを構築。学年ごとに毎月の課外活動や試験、進路行事を示し、学年間で指導に差が出ないよう配慮している。

３学年団では、進路指導部から月1回、指導の目線合わせを行うために、その時期に押さえておくべき留意点を記した「目線合わせシート」を配布する（図）。「この時期の特徴・留意点」「進路指導の重点項目」「教科学習指導の重点項目」などが詳細に記されたシートで、担任が達成状況に応じて項目にチェックを入れる形式となっている。いわば月刊の進路指導シラバスのようなものだ。今、担任として何をすべきか、生徒はどのような状態にあるのかということを知ることが出来るため、新任教師の指導力向上にもつながる。

「大学全入時代を迎えたからこそ、一部の教師が進路指導を知っていればよいという時代は終わったと思います。これからは全ての教師が進路指導を出来なければ、生徒全員の受験には対応できません」と石村先生は強調する。

図　目線合わせシート



7月～8月の指導
～「団体戦」を戦い抜くための個を育てる　～

1　夏を迎えるにあたって6月を省みる　　□にチェックを入れてみる。

この時期の特徴・留意点	課外がスタートし、新しい学習リズムを確立する □保護者との連携が不可欠。登校時間や下校時間を意識させる（厳守させる）ことによって、課外開始までの時間や課外終了後の時間の自学がスムーズに行えるようになる。 □まとまった時間（1時間以上）と細切れの時間（10分～30分）に、それぞれ何を学習することが効率的かを具体的にアドバイスする。 □まずは「質より量」。自分を学校のルールやシステムにはめるように指導する。見た目や行動を変えさせることからはじめる。 □学習時間を増やすために、何の時間を削れるかを具体的に指導する。 □学習を開始する時間を固定させる。 □気分転換は計画的にさせる。 □通塾者が増える時期。塾の利用の仕方などについてもアドバイスが必要。塾の勉強のために学校の勉強が疎かになる生徒が必ず出てくる。生徒のためにも、先手を打ってあげたい。 □休日の学習時間が伸びない生徒が最近多い。課題のない休日の過ごし方は課題。特に中学時代に塾をペースメーカーにして勉強してきた生徒たちの自学力育成に力を注ぎたい。
進路指導の重点項目	入試制度（入試とはどういうものか）の理解を進める □「入試とは何か（仕組みと厳格さ）」を考えさせる月にする。 □出願の留意点、センターの日程、試験時の作法、センターと個別の配点、自己採点をする意味、1点の重みなど、行く手をイメージさせ習慣を変えさせる。 模擬試験の受験の仕方を指導する □復習を習慣づける。「解答を読んで終わり」から「解答を読んで、もう一度完成答案作成」へ。受験生としてのやり直しの基準を明確にする。 □模試の度に記入する志望大学に意味を持たせ、その変化を認めてあげる。担任の指導が見える推移とする。 □一人ひとりの、2年2月進研 MS から3年6月進研 MS までの推移を検証する。 □目標点設定は具体的に！作戦を一緒に考えてあげることから、生徒が何を困っているかが理解できる。

面談のポイントや生徒の状態、教科学習の重点項目など、時期に応じた指導のポイントが網羅されている。担任間の目線合わせのみならず、若手の指導力向上にも一役買っている　＊学校資料をそのまま掲載

進路と学年の意思疎通を進路指導部会で図る

進路指導部の意向を学年に浸透させるための組織体制の構築も強化する。その中心となるのは進路指導部会だ。従来は進路関係の行事日程を連絡する場だったが、今はそれに加えて、直近の進路指導・行事について学年団からの報告と、学年間のノウハウの共有も行っている。例えば、11年5月の部会では、スタディーサポートの結果を受けて立てた学年ごとの対策や、6月のマーク模試に向けた指導方針などを発表し、その上で取り組みに関する疑問や課題について、学年を超えて指導案を出し合った。

方針として決定した事項は後日学年会で発表し、担任団で意思疎通を図るのである。進路指導主事→各学年の進路指導部→各学年担任団という指示伝達のステップを踏み、更にその指導が生徒にどう響いたのかを担任から吸い上げるというサイクルを回すことで、進路指導部と担任団の目線合わせがスムーズになった。

進路指導部と学年団の結節点になるのが学年リーダーだ。進路指導部員の中から各学年担当一人を選出し、学年主任とは別に、それぞれの学年の進路指導の取りまとめを担う。

「教師一人ひとりが当事者意識を持つためには、各学年が自分たちで考え行動することが重要です。進路指導部からの指示で動くのではなく、学年リーダーから担任団へというように学年の中で横に広げていくことで、活力ある組織を生みだせると考えています」（石村先生）

担任、学年団、進路指導部がタイムリーに生徒情報を共有

生徒の変化に応じて指導をフレキシブルに改善できるのも、生徒把握と教師間の情報共有がスムーズに出来るからだ。

まず、担任が面談や生徒との会話などから日々の生徒の状況を把握する。その中で、担任は気になる生徒について前述の進路指導部会や学年会で報告。それを受けて進路指導部や学年団がしかるべき対策を練る。生徒から担任へ、担任から学年や進路指導部へという「二段階の吸い上げ」がポイントとなる。

日々の生徒の変化を捉えるアンテナの役割を果たすのは、担任と生徒の面談である。前述の「目線合わせシート」によるチェックも、担任に生徒との面談や会話を促し、生徒の変化をいち早くキャッチするためでもある。変化を即座に捉える情報収集・分析能力、それを指導に反映させる組織の機動力と柔軟性が、変動の激しい新課程への移行期を乗り切る重要なポイントになるのである。

こうした日々の生徒把握と教師間での情報共有は、教科指導の改善にもつながっている。例えば早朝学習は、ここ数年、基礎基本の定着という目的に沿って基礎的な問題を取り上げてきたが、最近は発展的な問題も入れて成績上位層の意欲も喚起している。これは、学力層の拡大という現状を踏まえ、全ての層を引き上げる指導を実現したいという思いからだ。

また、数学では模試分析の結果、特定の分野で基礎が未定着であることが分かった。そこで、これまでは出来るだけ早く教科書を終え、残りの時間は演習に当てていたが、今年から1週間のうち1コマを復習の時間とすることにした。

「『量から質へ』という議論は現行課程への移行期にもなされました。当時は量と質は相反する概念だと考えていましたが、今回の課程では『量の中から質を出していきたい』と思っています。量は否定せずにそこからいかに効率的に質の向上を図るか、検討を進めたいと思います」（石村先生）

「少しでも歯車がかみ合わなくなったら、どんどん悪い方に向かってしまうという危機感は常にあります。だからこそ、先生方を巻き込んで、学校全体で生徒にぶつかっていかなくてはなりません。教師一丸となって10年先を見据えた第二高校をつくっていくという気持ちで、新課程に臨みたいと思います」（前田先生）